

タイトルのつけ方

首藤 静夫

中学時代の国語の時間。

「みんな気をつけろよ、危機一発ではないぞ、危機一髪だからな」。ちょうど「007危機一発」がはやっていた。銃声一発を連想させる、映画にマッチした題名だった。ちなみに受験生配慮か、この映画が日本再上陸の時は「ロシアより愛をこめて」に改まった。これも良い題名でポンド人氣が再燃した。かようにタイトルは重要だと思つ。エッセイを書く度にどうつけたものか、いつも迷う。

漱石の『坊ちゃん』『三四郎』は主人公そのものがタイトルで、読後に坊ちゃん、三四郎の颯爽とした姿が浮かぶ。『草枕』は何となく旅物だろうと思つけど、読み終わるまで内容が想像つかない。少し引いた感じのタイトルだろうか。『吾輩は猫である』はすごい。何だ何だ、何が起きたのかと思つ。

同じ文豪でも川端康成のタイトルはシックなものが多い。『雪国』『古都』『山の音』など。しっとりとした内容を想像させる。

読む前からわくわく期待させるタイトルは多い。純文学では谷崎の『痴人の愛』『卍』『鍵』など。しかし期待外れでガツカリのこともある。

梶井基次郎の『檸檬』、芥川の『手巾』。短い小説だが、ストーリーを象徴する檸檬、手巾の存在が強烈だ。

一葉の『大つごもり』や三浦綾子『塩狩峠』はクライマックスの場面がタイトルだ。この言葉を聞くと最後に最後のシーンがよみがえる。

三島のタイトルは彼らしい華美な漢字が並ぶ。『金閣寺』『豊穰の海』『禁色』『仮面の告白』など。中身の想像はつきにくい。

大江健三郎のは文章もタイトルも長く、おどろおどろしい。『芽むしり仔撃ち』『万延年のフットボール』『新しい人よ眼ざめよ』『洪水はわが魂に及ぶ』など。

しかし、どのタイトルも作者の個性が出て、これでいいのかも知れない。文中の主人公を最初に出すか、クライマックスシーンで勝負するか、全文の雰囲気匂わすか、など色々考えられている。

さてこの小エッセイのタイトル、何と芸のないことよ。